

【10-2-8】 履修モデル（国際文化学部国際協力量科）

国際協力量科の履修モデルの考え方は下記に示すとおりです。

国際協力量科の養成する人材像に対応して、「文化協力」「文化支援」に則した履修モデルをそれぞれ提示しますが、これはあくまでもモデルであり、学修の方向性を示すとともに、各学生の進路希望に合わせて履修科目についてのアドバイスですから、学生のみなさんは、それぞれの興味・関心にふさわしい科目選択をするように心がけ、その際の参考として活用してください。

① 文化協力モデル

国際理解にもとづく文化協力の担い手として活躍する学生のために

a) 想定される進路

観光・流通・航空業などを中心とした民間企業、とりわけアジア諸国との関係が深い企業活動や、アジアを中心とした国際協力活動に従事する機関や団体など。

b) 履修モデルの考え方

国際理解・多文化交流のあり方を自覚的に考察する能力を養い、多様化しつつ、さらに格差を拡大している現実のグローバル社会における文化協力と、文化的共生を核にした国際貢献を実践できる能力を養うことを目標とします。

c) 履修科目の概要

国際文化学部において、英語教育の根幹部分は必修科目として配当されています。国際協力量科も、1年次の学生は、《NGU 教養スタンダード科目》における必修の「基礎英語 1・2」「英会話 1・2」で基礎的な英語力を修得すると同時に、国際協力量科《基幹科目》における必修の「英語演習 1・2」を履修します。続いて2年次で「英語演習 3・4・5・6」（必修）を履修し、いっそう応用力を増した英語力を獲得することが目標です。同時に、本学科では第2外国語学習を選択必修とし、「ドイツ語」、「フランス語」、「スペイン語」および「中国語」のいずれかについて、1年次から3年次まで10科目（10単位）を履修します。この他、さらに上級の英語能力を養う科目を多数配置し、選択することが可能です。

この履修モデルでは、国際社会における共生・協力に関して、国際関係・国際協力の原理と実体を正確に理解し、国際協力とりわけ文化協力の場面で実践的な対応が取れる人材の養成をめざします。《学科基幹科目》における必修科目の「国際関係論」「国際協力論」に加えて、「国際文化支援論」「開発社会学」「文化交流論」さらには「ジェンダー論」や「マイノリティ論」などを学ぶこととなります。これにより、単に世界を既成の地理的な区分で理解するのではなく、それぞれの国や地域あるいは文化圏において多相な人々の現実の生活があることを理解することができます。さらに、《国際文化協力展開科目》の「国際移民論」「アジア政治論」「国際機構論」「アジア地域関係 1・2」などをおして国際関係のあり方を深く学ぶとともに

に、世界の中で日本が置かれた状況、とりわけ開発途上国と日本との関係を多様に学ぶことで、国際協力の真のあり方を学修し、実践力を身につけることができるようになると思っています。

② 文化支援モデル

国際文化支援の実践者として活躍する学生のために

a) 想定される進路

国内における国際協力事業のみならず、国際的活動をしている NGO・NPO、国際公務員など。

b) 履修モデルの考え方

開発途上地域の実情やそこでの支援活動を理解し、現実的な途上国支援のあり方について学び、国内外で積極的な国際支援活動へ参画できる能力を養うことを目標とします。

c) 履修科目の概要

英語および第 2 外国語に関する履修科目については、上記の「文化協力モデル」と同様です。

国際支援を中心に据えたこのモデルでは、文化協力モデルと同様に、《学科基幹科目》における必修科目の「国際関係論」「国際協力論」に加えて、「国際文化支援論」「開発社会学」「文化交流論」さらには「ジェンダー論」や「マイノリティ論」などを学びます。これにより、単に世界を既存の地理的な区分で理解するのではなく、それぞれの国や地域あるいは文化圏において多相な人々の現実の生活があることを理解することができるようになります。

さらに、《国際文化支援展開科目》において「文化マネジメント論」「多文化共生社会論」「多文化教育論」「国際人権論」など、特に開発途上国の支援を念頭に据えた科目を中心に履修します。併せて、「国際環境文化論」「企業文化論」「世界遺産と保全」など、開発途上地域の実情を理解し、支援活動を考察することで、現実的な途上国支援のあり方を学ぶとともに、現実のグローバル社会とりわけ発展途上国に対する実践的な支援展開のための実践力を養うことにあります。この能力は対外活動が活発な日本企業で働く上でも、重要で役に立つ技能でもあります。

◎学びの流れ

